

作家・子母澤寛誕生の風土

—幕府軍敗残兵3人と厚田村—

吉田悦志

こんにちは。塩原主事から懇切丁寧なご紹介をいただきましたので私のほうからあえて自己紹介をすることは避けたいと思います。なぜここで私がしゃべることになるのか、あるいはなったのか。といういきさつについては私の話を聞いていただければ「ああ、吉田がここに立っているのは不自然ではないな」、自然とまではいいませんが不自然ではないという理由付けになろうかと思しますので是非最後まで聞いていただければと思います。

本日は、「作家・子母澤寛誕生の風土」というタイトルでお話いたします。子母澤寛さんの小説家としての業績であるとか、人となりは多分皆さんはあまり知識がないだろうということを前提にしながら、時代背景も含めてお話をしていこうと思います。

子母澤寛という小説家が誕生する。彼を取り巻いていた様々な環境から話を進めていきたい。風土というと皆さんはどんなことをお考えになるでしょうか。まず大きく風土といった場合、環境の前に自然をくっつけますよね。つまり自然環境、1つ目は地理的な環境が風土にはある。それから2つ目はいつの時代かという時代的環境があります。これも風土の2つ目の特徴です。ですから時代環境は、今日皆さんにお話しする内容は、ほとんど幕末から明治維新にかけての話です。西暦でいえば1868年を基点として前数年、後10年、20年というふうに刻んでお話をしていこうと思います。つまり幕末、徳川時代の終わりから明治、大正、昭和初期くらいまでを視野に入れた話をしていきます。これが風土という場合の2つ目の時代的環境というふうに申し上げておきます。ちょっと日本史をかじった人ならばお分かりいただけると思いますが、戦争でいえば戊辰戦争ですね。そのあたりの話が中心になります。3つ目の風土、あるいは環境、これは社会的環境とっていいと思います。風土の説明をしています。社会的環境という場合、今日話題にしたいのは、大阪辺りの港を船がスタートします。荷物を載せた船がスタートして瀬戸内を西に向かいます。瀬戸内を西に向かって行って、下関から北上を始めます。つまり日本海側に出て日本海側を、例えば福井に寄ったり、あるいは山形県の酒田に寄ったり、行く船によっては北海道の石狩湾岸、例えば小樽、石狩、今日の話題の中心になる厚田、さらに行きますと増毛（ぞうもう）と書いて、なんと読むでしょう。増毛と書いて「ましけ」と読むんです。あの辺りまで北限として行った貿易船がありました。これを北前船といいます。石狩湾岸ではこれを弁財船といっ

たようです。そういった富と人をもたらず船の物流という環境が、3つ目に社会的環境としてあげられるだろうと思います。そして4番目、これは最後の風土環境なんですが、人です。一番最初の地理的環境そして時代的環境、社会的環境ひっくるめて動いていくのは人です。つまり人的環境。この4つを合わせて風土と私は呼ぼうと思います。

その風土でもアングルを絞っていきますと、石狩湾岸の石狩の国、江戸時代では石狩の国厚田こおりぐん郡、郡ぐんです。厚田郡厚田村、大字厚田に絞っていきますとそこに土地として風土として、そしてその土地にあった空気くわいの面白さみたいなものがわかってきます。その空気を吸って幼少年時代を経て小説家になったのが、子母澤寛だったということです。そんな話を江戸時代の末期に徳川幕府の側について負け戦を戦った3人の幕府軍の敗残兵を、取り上げながら厚田に収斂させてお話をしていく。その3人の幕府軍の敗残兵もまた子母澤寛という作家を生んでいく人的環境に深くかかわっているということでもあります。

厚田という言葉は何度もいいます。それは皆さんとも無縁の風土ではないはずですが。皆さんが日々その固有名詞には触れておられ、人物の名前とそして場の、トポスの名前とがリンクしているはずですが。

まず作家・子母澤寛という人と作品についての簡単な紹介をしておきたい。その予備知識がありませんと作家・子母澤寛誕生の風土といいましても、その実態が掴みきれないと思いますので、若干子母澤寛さんの人と作品について説明をさせていただきます。子母澤さんは、小説家である。猿が好きな小説家です。猿を飼ってましてね。写真を載せればよかったんですが、頭がお坊さんみたいに剃りあげてあるんです。どうして剃りあげてるかという飼っている猿が、頭の上にびよんと飛び乗ると頭髪があると滑っちゃう。それじゃあ、あんまりだ。猿が、愛猿家あいえんかなんですね。煙草ではありません。猿を愛する人。それで頭を剃って滑らないようにした。爪が引っかかるで

資料1. 石狩湾岸に集う映画・音楽・文学と歴史

▶ **中央分水嶺** (株・田舎元気本舗HPより)

日本海

中央分水界
頂上付近の高さは1000m～3000m

水の流れ
水が二手に分かれる

5000 km

太平洋

歴史的には、新撰組や彰義隊
歴史と文化

(4) 石狩湾岸に集った
シヨンである。

在人物である他は、全てフイク

「駅 STATION Blu-ray」
Blu-ray発売中 ¥4,700+税
発売・販売元: 東宝

総距離 196.93km
(石狩湾岸三日月上弦の月地形)
○高倉敏主演「駅 STATION」- 阿久悠「舟曳」 桂浜-増毛
○子母澤寛監製「新撰組」物議3部作-彰義隊 石狩市厚田
○横戸集治監「月形判務所」-阿久悠「五社英雄」北の家」-新撰組 月形

しょう。そういうことらしい。子母澤寛は、明治25(1892)年2月1日の生まれです。写真¹が出てきましたね。サンちゃんという猿です。右側が子母澤寛先生です。これだと滑らないよね。サンちゃんの爪が引っかけたってね。なんとなくお坊さんの雰囲気あるでしょう。こう俗世、濁世を潜り抜けて飛び越えたところにこの子母澤さんの風貌というのは生まれてるんじゃないかなというふうに思います。これはまた作品解釈の問題になりますので飛ばしていきます。子母澤寛が生まれたのは、先程申し上げました北海道の厚田郡厚田村(現在の石狩市厚田区)です。

ここが北前船が行く北限に近いところだと思います。増毛^{ぞうもう}と書いて増毛^{ましげ}。そしてここが銭函という場所です。ここが小樽です。小樽のちょっと下にこの地図では明記されていませんが毛無山という山があります。そのちょうど真ん中のチェックポイントが厚田です。石狩川もあります。ここが月形というところで明治14(1881)年に刑務所ができました。監獄です。正式な名称は樺戸集治監といいます。ここの場も大変大事になってきます。この樺戸集治監から厚田村へ、もちろん徒歩で行くこともできますけれども、かなり厳しい道のりです。この監獄を脱獄した凶悪犯が厚田村にやってきたというエピソードも残っています。それから大きく日本列島の地図に向かってみますと、ここが石狩湾岸です。この真ん中を貫いている曲線。これは中央分水嶺、あるいは中央分水界といいます。ここを境目にして日本の山地山脈のもっとも峻険なところを線で結ぶようになりますということです。ということは、この中央分水界を境にして、水が日本海側に流れるか、太平洋側に注ぐかの分かれ目になります。この分かれ目が、精神伝統であるとか、文化であるとか、そういったものの非常に大きな違いを生んでいるのではないか。だから日本海側地域には日本海側独特の精神風土がある。その精神風土の石狩湾岸、厚田、典型的な日本海側地域だということをご説明申し上げて元に戻ります。

子母澤は、この厚田に生まれます。本名を梅谷松太郎といいます。何か感じませんか。つけた人、もう1字くっつけたらいいんじゃないの。そうすると満願でしょ。おめでたいじゃないの。私なら梅谷竹松とつけます。でもおじいちゃんをあえて竹をつけなかった。その理由はお分かりでしょうか。日本人というのは完璧なものを嫌う民族です。例えばお茶碗でお茶を入れて飲むときに左右対称のきれいな器よりもひん曲がったような、手の跡の付いたような、手工芸のような、あるいは千利休だとちょっと欠けたくらいの茶碗がいいと思います。これはパーフェクトではなくて少し足りない。そこに日本人の精神が安住を求める。そういう傾向があるのではないか。庭もそうですよね。だから名前も伝統的には、今は違いますよ。今は本当にパーフェクトな名前がつけられますよね。宇宙まで飛んでいきそうな名前もあります。でもやはり何か一字抜くことによってその子が背負う人生の重みを軽減してやる、親の期待があまりにも高いためにこの子が押しつぶされてしまわないために1つ欠いてやる。そうしたらフットワーク軽く人生を歩める。そんな配慮がある。だから梅谷十次郎、おじいちゃん、子母澤寛さんの本名を梅谷竹松にしないで松太郎にしたんだろうと思います。日本人なんです。おじいちゃんが。

¹ <https://amanaimages.com/info/infoRM.aspx?SearchKey=23007004707&GroupCD=0&no=>

父と母は縁が薄かった。惨憺たる血族関係です。はっきり申し上げますと、子母澤さんのお母さんのイシさんはいまだに顔写真も名前もはっきりしていない男の、子どもを身ごもります。厚田にやってきた青年です。その子が生まれる前にお父さんは村を出ています。生涯、子母澤さんは父の顔を知らずに成人していきます。生まれた直後に今度はお母さんが別の男性、橘巖松という男と厚田村を出て、札幌に行きます。出ていった橘巖松とお母さんとの間に2人の子どもができました。お兄ちゃんのほうは後に有名な洋画家になります。三岸好太郎という画家です。この画家は今、札幌市内に北海道立三岸好太郎美術館という立派な美術館があります。それが子母澤寛さんの異父兄弟です。お父さんが違うんだけど、イシという母親は同じです。もう一人の妹はお花の先生だと聞いております。イシさんが産んだ3人の子どもは3人とも芸術家です。そのイシさんの遺伝子を濃く引き継いだのが、この子母澤寛さんであろうかと思えます。

おじいちゃんは梅谷十次郎といいます。この梅谷十次郎と子母澤寛さんとの間には血縁関係はありません。戸籍上の親になっていますが、おじいちゃん、血の繋がりの無い孫を慈しみ育てます。このおじいちゃんの影響が子母澤寛文学を成立させる大変大きな要因になっています。それはおじいちゃんが上野で戦った幕府軍の敗残兵だった。逃げて逃げて逃げて北海道の厚田にやってきた。徳川慶喜が上野の寛永寺に籠って、そして謹慎をしている周りに徳川の武士たちが集まって彰義隊を結成し、徳川幕府を守ろうとした戦いが明治元年（1868年）に上野で行われます。それが彰義隊の戦い。そのメンバーの1人です。逃げて厚田の村にやってきます。

子母澤さんは、その後北海中学を経て大正3（1914）年に明治大学の法科専門部（法学部の前身）を卒業いたします。入学したのは、明治44（1911）年です。卒業後転々としながら大正7（1918）年に読売新聞、それから引き続いて、毎日新聞、東京日日新聞と転籍しながらジャーナリストとしての活動を開始します。彼の記事の特徴は、現場に行き、そして記事にする。現場の声、現場の風景そういったものから記事を書いていく。ここに子母澤さんの若き日の、記者時代の特徴がございます。

そして、新聞記者のあと彼が書いたのは小説でした。その小説が最初に書かれるのが昭和3（1928）年です。勿論その前にも習作、トレーニングの時代に書かれた作品もあるわけです。作家のデビュー作として世間が認めたのは昭和3年の『新選組始末記』という作品です。そして続いて『新選組遺聞』、さらにたたみかけるように『新選組物語』という3冊を完成させます。それによって新選組3部作が完成する。子母澤さんが世に問うたこの新選組は、今までの新選組と何が違うと思いますか。大きく違うんです。明治維新というのはどういう人たちが起こしたんですかね。徳川幕府を倒して1868年からスタートした明治国家は誰が作ったんでしょうか。薩摩、長州、土佐、肥後です。いわゆる薩長土肥連合がこの新国家をつくった。その薩長土肥連合を京都で散々痛めつけたのは誰だったんでしょうか。新しい時代をつくらうということで奔走していた青年たちを叩き斬ったのは誰だったんでしょうか。新選組です。ということは、明治国家になってから明治、大正、昭和の間、子母澤さんが『新選組始末記』を書くまでは、少なくとも国民教育として徹底してやられていたことは、新選組イコール悪い奴だ。悪だ。テロリストだ。血塗られ

た集団である。こういうことを国民に薩長藩閥政府の国民教育としてなされていたはずです。だから国民のみんなの頭の中にあるのは、新選組イコール悪い奴です。

それに対してアンチテーゼ、違うんじゃないの。確かに彼らは時代の後ろ向きの集団ではあった。でも守ろうとした正義に間違いはないはずだ。信じたものを貫いただけであって、彼らは会津藩の藩主松平容保侯の手配下におかれた「警察」であるという位置づけを子母澤さんが初めてしてるんです。ある人の言葉を借りながら子母澤さんは謙虚に『新選組始末記』の中に「警察である」と書いています。そういう新選組観を提起した作家はそれまでにいません。そこからです。子母澤さんの新選組3部作があって、皆さんがよくご存知の、もう亡くなりましたけれども司馬遼太郎さんの『燃えよ剣』が書かれることになった。司馬遼太郎さんは『燃えよ剣』を書く際に子母澤さんのご自宅に表敬訪問に行かれてるんです。先生の3部作を使います、ということで許可を得た上で司馬遼太郎さんは『燃えよ剣』を書いた。

次にその系譜を受け継いだ作家、存命で活躍中です。誰かご存知ですか。名前を聞いたらわかると思うんですが、浅田次郎、^{ぼっぼや}『鉄道員』を書いた人です。浅田さんが3部作、新選組3部作を書いています。1つは吉村貫一郎という新選組の隊士をモデルにした『壬生義士伝』。ほんとに面白いですよ。映画にもなってます。次に京都に島原という遊郭があった。長崎じゃあないですよ。京都の島原に遊郭があって、そこに輪違屋という遊郭があった。遊女がいっぱいいるわけです。その輪違屋という遊女たちを置いている場に、そこから歩いて、私が歩くと20分くらいかかるんですけど、新選組の隊士なら10分くらいで行っちゃうくらいかもしれません。壬生寺という寺があるんですけども、そこから歩いて島原まで土方歳三や永倉新八なんかが通ってた。これを遊郭にいる女性たちの眼で描いた作品。これを浅田さんが書いた。女性の眼から見た新選組の隊士たち。『輪違屋糸里』という小説です。テレビドラマで1回、上戸彩さんが主演でやりました。なかなか面白いドラマです。そして最後に3つ目は斎藤一という新選組の中でも3本の指に入る剣術使い。その斎藤一を主人公にした作品で『一刀斎夢録』という作品を書き上げて浅田さんの3部作は完成してるんです。浅田さんの3つの作品も司馬さんの『燃えよ剣』も、その間に池波正太郎さんも入るんですけども、その系列は全て子母澤寛さんの3つの作品を参考にしながら作り上げている。しかもそれはどれも新選組はテロリストではないということを徹底して描いています。ということは子母澤寛さんがどれほど影響を与えたか、ということでもあります。

他にも子母澤さんの作品はたくさんあります。講談社から出ている全集は25冊あります。上下2段組で小さな活字で25冊ですから相当な作品があります。特徴として幕末維新の武士物、今の新選組もそうですね。そういった系列と所謂諸国を流れていく、股旅というんですけども、所謂任侠のヤクザ物ですね。そういった者の最もヒューマニティーに富んだ人たちですね。例えば清水次郎長とか国定忠治だとか、そういったものを扱った作品が1つあります。中でも皆さんがよく知っている作品をそのページの一番下にあげておきました。ご存知でしょう。『座頭市物語』です。先に動画を見ていただきます。(映画『I C H I』の予告編を上映)そこで止めてください。ここに原作、子母澤寛となっております。この女座頭市、綾瀬はるかさんが見事に演じきってしまし

た。原作の『座頭市物語』の映画化、またはテレビドラマ化をそのページで紹介しています。勝新太郎という、亡くなりましたが座頭市を演じきった人です。この方主演の映画が26本くらいあります。それからテレビドラマは100話あります。それから舞台が何回か上演されています。市川海老蔵さんと寺島しのぶさん共演で歌舞伎を演じている。だから連綿と書き継がれている作品です。ストーリーは単純なんです。盲目で居合い抜刀術のすごい市が流れ流れて宿場町にやってくる。ヤクザがはびこっている。庶民をいじめている。叩き斬って出て行く。来る、斬る、出る。このシンプルさがいいんでしょうね。あとはどうにでも脚色できる。その根元にたった原稿用紙20枚程度、活字に直せば、先程申し上げた全25巻の子母澤寛全集でいえばたった5ページに満たない。今申し上げた来る、斬る、出る、が連綿と作られ続けて勝新太郎さん、鳥取県米子出身の岡本喜八さん、映画監督北野武さん、そして先程見ていただいた曾利文彦さんの『I C H I』とずっと作られ続けて、まだまだ行くでしょうね。そのくらいの影響力を子母澤さんは与えているということでもあります。だから新選組だけではなくて面白いエンターテインメントの世界でも影響を与えているということでもあります。

さてここからが本論です。そういった幕府軍側によった数々の作品の中に登場する、あるいは関係する3人の顛末のお話をしていこうと、いうことでもあります。

新選組は先程から紹介しているとおりですね。京都の治安を守るために組織された会津藩のお抱えの警察隊である、というふうに覚えていただきました。その京都で起こった鳥羽・伏見の戦いという薩長の官軍と幕府軍との戦いに参戦しますが負けます。徳川慶喜が逃げて江戸に帰ります。江戸の上野の寛永寺に立てこもります。上野のお山に立てこもって長州、薩摩の連合軍と戦う。1日で負けました。彰義隊の戦いといいます。その2つの隊の話をしていきます。

左側の写真を見てもらえますか。どんな感じを受けるか。写真が見にくいけど何となくおっか

資料2. 幕府軍敗残兵3人の顛末—新撰組と彰義隊

▶ 梅谷十次郎



牧田重勝と永倉新八・大正2年



牧田重勝



梅谷十次郎の写真は、「幕末 本と写真」<http://oldbook.hatenablog.com/entry/2016/06/25/214053> より、真ん中の集合写真は、「北海道開拓記念館所蔵」（ここでは「北海道人」http://www.hokkaido-jin.jp/issue/sp/200407/sp_10.html より）

なそうですね。逆らうとひっぱたかれそうな。この人、後ろを向いて着物を脱ぐと背中にでっかい龍の刺青がある。学者というのは見てきたようなこといいますね。見たことない。特に歴史学の先生は大嘘をつく。「織田信長がさ」って会ったことないのに。この人が子母澤寛さんのおじいちゃん。彰義隊のメンバーです。次に見づらくて申し訳ないんですけど、この真ん中に長いあごひげを生やした人物がいます。細いステッキの様な物を持っています。仕込み杖ではないと思うんですけども、剣代わりにはしているんでしょう。杖にしては長すぎます。この人物は新選組の二番組長永倉新八という人です。先程いいました。斉藤一か、永倉新八か、そして比べようもない剣術家としては沖田総司。この写真は、大正2（1913）年に札幌で撮られたものです。永倉新八の左にいるのが牧田重勝という人です。この人は上野で戦ってますから彰義隊の残党です。この3人がなぜか、1人はまだ確かな情報を握っていませんけれども書かれている物でそこにいたという発言がありますので、一応全員がということにしておこうと思います。厚田です。地理的、時代的、社会的、人的な風土がそこへ人を呼び寄せていくんだ。そんな所が厚田であると。この3人について次にお話を申し上げます。

子母澤寛さんのおじいちゃん、梅谷十次郎です。藤堂藩というのは現在の地名でいうと三重県です。津市の近くですね。

藤堂藩の江戸詰の下級武士であったであろう。私もこの人物の名前を探しに津市まで出かけて、江戸時代の日記であるとか、名簿であるとか見たんですがどうしてもこの人物を見つけることができませんでした。だから、やはり記録にも出てこないような下級武士だったんだろうと思います。参勤交代のときに江戸にやってきて、そこに定着させられる。つまり藤堂藩の東京出張所ですね。そこに永年勤続になっちゃった、というふうな形で江戸住まいになっている。そのとき上野で戦争が起こったということです。梅谷十次郎は、嘉永元（1848）年生まれである。梅谷十次郎の息子はこんなふうにっています。「直参の侍」、これもちょっと疑問があります。梅谷十次郎が旗本であるということは眉唾であると思いますので、平の侍としておいたほうが無難かなと思います。次は本当のような気がします。「ものすごい龍の刺青を背中にしていた。それで喧嘩を止めるとき」、喧嘩を止めるだけではなかったんでしょうね。喧嘩をしに入っている可能性があります。かなり喧嘩っ早い人だったんじゃないか。ただし、正義感が強いですから、でなければ上野で戦ったりしません。だから悪い喧嘩をする人ではなかった。正義感に駆られて、例えば強い者が弱い者を苛めているのをみたらばかばかとやっつけたということはあったんだろうと思います。「そんなじょそこの遊び人じゃなくて、本物の筋金入りの遊び人だったと思うんですよ」ということであります。それで先程いいましたように梅谷十次郎は上野で負けて鶯谷のほうを通過して、板橋のほうを通過して北上して行くんです。

陸路で仙台まで行きました。その仙台の沖合いに榎本武揚^{えのもとぶよう}の軍艦が浮かんでいた。榎本武揚って知ってますか。幕府の軍艦の艦長です。北海道へ行こうと。それに梅谷十次郎は合流する。新選組の土方歳三もこのとき合流したといわれています。そしてそこから北へ、北へと行って函館までですね。榎本武揚や土方歳三たちと、函館に五稜郭というお城があるんですけど、そこを

中心とした函館戦争を戦います。これも負ける。これが明治2（1869）年です。そして監禁されます。函館にあった会津藩の、これも出張所でしょうね、そういうところへ幽閉されて、そして解き放たれて刀を棄てるという約束をして、武士の身分を返上して解放される。仲間6人と、これもまたはつきりしません。ほんとに6人が厚田の村に行ったかどうかはこれから検証していかなければならないんですが、少なくとも主人公であり、つまりこのお話をしている梅谷十次郎は厚田まで行きます。厚田に定着をして結婚をし、生活を再建していきます。これは子母澤寛さんが書いた『厚田日記』という作品があります。これに非常に細かくこら辺の経緯は書かれています。先程丁寧に紹介していただいた中に私の書いた『明治大学文人物語』というのがあります。その中にも書いておきました。

さて、そのおじいちゃんが夜になると梅谷松太郎を膝の間に入れて、大きな湯飲み茶碗で酒を飲みながら、江戸の話や、彰義隊の話、勿論土方と共に戦ってますから新選組の話もしたろうと思います。それをちっちゃい梅谷松太郎に語り聞かせる。それは抽象的は言い方をすればおじいちゃんから、梅谷松太郎、血のつながりのない孫に江戸の灯をバトンタッチしている、そういう構図なんだろうと思います。このバトンは見事に手渡されました。これはおじいちゃんの物語を聞いて成人した子母澤寛さんが新選組3部作を残しているということで十分納得していただけるのではないかと思います。このおじいちゃんの影響なくして子母澤寛が小説家としてスタートすることはなかった。それも場は厚田です。厚田という風土です。そのことを大きな湯飲み茶碗で酒を飲みつつ、江戸の話や、彰義隊の話、五稜郭戦争の話をしたと語ったのは『街道をゆく』の作者、司馬遼太郎さんです。司馬さんがこの中で書いています。もう一度、ルートだけ確認しておきます。梅谷十次郎さんは上野、仙台、函館、札幌、石狩、厚田、そして最後に札幌に出

資料3. 牧田重勝（彰義隊）1

- ▶ 牧田重勝1854（安政元）年生まれ。奥州白河棚倉藩。江戸上屋敷で小姓役。15歳の時上野彰義隊に参加。鹿島神伝直心影流。回天・鱗竜・高雄に分乗して函館。宮古湾沖で官艦8隻接船奇襲攻撃を試み失敗、降伏。常安寺に繋がれるも逃亡。函館に着いた時には函館戦争は終わっていた。
- ▶ 異説。兄三之助重孝、鳥羽伏見で戦い、明治2年白河戦で討ち死に。重勝家督相続。奥羽列藩同盟で仙台・会津で戦い、函館。
- ▶ 明治8年家禄を奉還して無禄士族となり東京へ移住。警視局巡查。明治11年西南戦争に巡查29人を引率して鹿児島へ。その後一等・特務と昇進。28歳樺戸集治監（月形）着任（明治14-22?）。明治22年石狩警察署勤務。明治23年札幌警察署就任。明治24年?厚田村に転住、厚田村安瀬のマルト漁場のカンビ（漁場の浜帳場）に。明治25年直心館道場主。明治28年厚田消防組の組頭。明治34年「直心館」名簿に梅谷松太郎の名前。明治43年札幌苗穂村に移住、「直心館」。



名簿「月形樺戸博物館所蔵」（撮影吉田）、集合写真と個人写真は、「JIKISHINKAGE-RYU KENJUTSU」
<http://jikishinkageryu.eu/hu/index.html> より

ます。厚田からは夜逃げをしたというふうの子母澤さんはいっています。貧乏で、食えなくなって夜逃げした。それまでは結構いい生活してるんですよ。ニシン漁でにぎわった厚田です。ニシン漁のときには何百、何千とまではいいませんが千単位のヤン衆、若者たちが漁のために厚田に集まって、そして寝泊りをその期日前まではして出て行く。もしかしたら、子母澤寛さんのお父さんはそういったヤン衆の1人ではないかと思えます。ただご遺族によると子母澤寛さんのお父さんは、東京の大学生であったと仰っています。ご遺族の発言として重いんですけども、私はどうもそうではないのではないかなと思います。つまり、厚田に行く理由が学生の立場だと見付からない。そこに漁場があって、物流があって、人的な交流があって、人を引き寄せていく魅力ある場として考えるとやはり漁師で若い青年だろうと、思います。梅谷十次郎は明治44（1911）年に札幌で亡くなっています。

2人目の人物にいきます。永倉新八、写真では白髪の人です。これは新選組二番組長です。先程から何度もいっていますように沖田総司、永倉新八、斉藤一、三剣士並び立つ姿というのは、これは相当の破壊力をもった集団だったんだということがいえると思います。杉村義衛^{よしゑ}という名前に後に変わるんですけども、剣は神道無念流。松前藩出身です。新選組の中でも剣道の指南役ですから、相当の剣術使いであった。これが京都の幕末で鳥羽・伏見の戦いを戦って負けて、江戸に上る。そして江戸から新選組の連中を追っ払いたいという勝海舟の策謀だといわれてるんですが、山梨にやられる。甲府城を攻めるといって作戦を立てられて、彼らは集団でそこへ行く。甲陽鎮撫隊という隊列組んでいって、そして負けて帰ってきます。負けて帰って、新選組のミニチュア版を江戸でつくる。それが靖兵隊という隊です。大きな組織ではありませんけれども、永倉新八がこれを組織する。でもにっちもさっちもいかないのでここで永倉新八は白旗を揚げて官軍の軍門に下る。降伏をいたします。そして明治4（1871）年には松前藩の藩医であった杉村松栢^{しょうはく}という人物の娘さんのきねさんと結婚をして苗字を変えます。つまり入り婿ということですよ。婿に入って永倉新八という名前を棄てて新たに出直そうということで、杉村義衛^{よしゑ}あるいは杉村治備^{はるのぶ}と名乗ります。そして、名前を変えながら生きて小樽に定着をします。永倉新八が名前を変えて移り住んだのが小樽です。

明治14（1881）年にこの北海道に樺戸集治監という監獄ができました。西南戦争の負けた不平士族、あるいは自由民権運動で敗れた人たち、あるいは、極悪非道な犯罪人もいます。そういった人たちがここに押し込められている。それが樺戸集治監なんですが、この初代の典獄、つまり監長ですね。樺戸集治監の監長が月形潔という人です。その名前をとって今この町を月形町といいます。また、この監獄の名前も俗称月形刑務所といいます。この月形潔さんが、小樽にいる永倉新八の噂か、何らかの情報を得たんでしょう。そんな剣術使いがいるならば私のところで働いてほしいということで、小樽にいる永倉新八に声をかけます。樺戸集治監の囚人たちを監視する看守たちに剣術を指南してくれということで客員のようなかたちで呼ぶんです。もう厚田へもう一步のところへ新選組は来ている。梅谷十次郎さんは厚田に彰義隊の残党として定着した。不思議な土地だと思いませんか。何か磁場のような、それを私はトポスというふうに言いたい。人を

引き付ける、物を引き付ける、そこを中心にして何かが紡がれていく、生まれていく、醸成されていく、そういった場というのはあるのだろうなと思います。そして、永倉新八は、その樺戸集治監の剣術指南になって明治15(1882)年か、16(1883)年から19(1886)年までここにいました。そして東京の牛込に戻ってまた北海道に明治32(1899)年に舞い戻ってきます。このころ、もしかすると厚田の直心館という知り合いの開いていた厚田村にあった剣道場に永倉新八が尋ねていった可能性がある。それがこの写真です。中央の写真の中段左から3人目のあごひげの老人が永倉新八ではないのかなといわれています。長いひげが見えますね。この永倉新八の隣にるのが牧田重勝です。

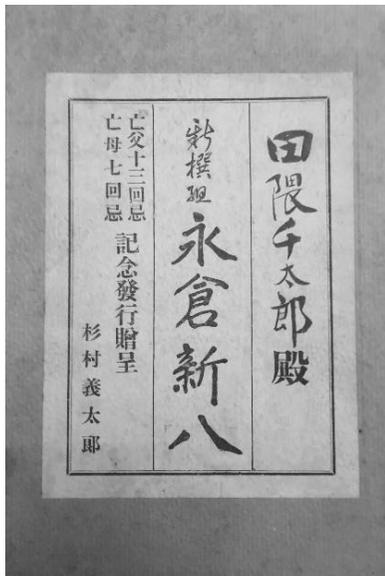
これが間違いないと証明するためにはここが厚田の地であることを示さなければならないのですが、今のところ漏れ聞くとところによれば、永倉新八じゃないかといえると思います。これが証明できたらまた論文の中に書いても問題ないと思っているんですが、これが厚田で、しかももう梅谷十次郎は住んでますから、永倉新八がいて彰義隊の残党の牧田重勝がいるとすれば、3人が厚田に引き寄せられているということになります。永倉新八はその後、東北帝国大学農科大学(後の北海道大学)の学生に剣道を教えている。面白い経歴ですよ。大正4(1915)年に77歳で亡くなっています。

資料写真の石段を見てください。ここ凹んでいますよね。ここがえぐれているんです。どうしてでしょう。これはここに閉じ込められた囚人たちが北海道開発なんかずく、道路工事、やっぱり物流ということを考えると道路を作らないとどうしようもないですね。だから、道路を作らせる

ために囚人たちに足に鉄球を着けて毎朝毎夕そこを通らせた。その動作のためここはえぐれたという説が1つあります。そうではないという意見もあるんですが、私は歴史のリアリティを考えればその方がはるかにリアリティがあると思います。そして樺戸集治監は今、博物館になっているのですが、そこに飾られている現物の鉄球であるとか、手鎖であるとかを見るとそんなに軽い物ではない。

その樺戸集治監がどんなものであったか。映画にしている人がいます。「北の螢」という映画です。五社英雄という監督が岩下志麻と仲代達矢を主演にして樺戸集治監に焦点を絞って描いた映画です。京都の芸者が1人の恋しい男を追って北へ北へ北へ追っかけていって樺戸集治監までやってきて、そこでどろどろのドラマを展開していくという「北の

資料4. 永倉新八(新撰組2番組長) 1



「月形樺戸博物館所蔵」(撮影吉田)

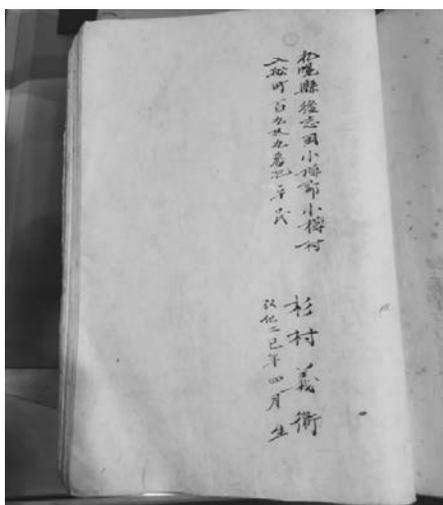
蛭」がどんなものか、ちょっとだけ見ていただきます。

この映画の中に永倉新八がでできます。簡単に「北の蛭」という映画と歌のエピソードを申し上げます。東映映画に岡田茂というワンマン社長がいて、その岡田茂さんが作詞家の阿久悠さんに、阿久さん、映画のタイトル考えてよ、と言う。脚本も何にもないんですよ。「北の方のイメージの映画タイトル考えて」と、阿久さんはいくつか考えて岡田茂さんに渡したら「阿久さんこれはいい。北の蛭で行くよ」と、阿久さんはどんなイメージでこのタイトルを考えたか。それはフランス映画の「情婦マノン」という映画がある。1人の女性が男を追っかけてどこまでも行くという話です。これを岡田さんが脚本家高田宏治さんに頼んで脚本を書かせたら京都の芸者の話になった。監督に決まった五社英雄さんから阿久悠さんに長文の手紙が来た。「早く主題歌を作ってよ、それを撮影現場でががん流しながらスタッフの士気を高めて映画を撮りたいんだ、そこでできたのが森進一が歌う「北の蛭」という歌です。「山が泣く、風が泣く、少し遅れて雪が泣く」なんて有名なフレーズがあります。

もう少し永倉新八についてお話しようと思います。これは何が書いてあるかといいますと子母澤寛さんの『新選組始末記』の一節です。この中に、新選組は会津藩主松平容保侯のお抱えの正式の警察であるということが書いてある文章としてこれを紹介しました。

最後の3番目の人物です。厚田に集う3人の話、牧田重勝。この人は2つ説があります。まず第1説ですが安政元（1854）年に生まれる。そして藩は、奥州白河棚倉藩、その名家の出といってもいいでしょう。白河棚倉藩の藩士である。江戸の上屋敷で生活をしていて先程の梅谷十次郎と同じように15歳のときに上野の彰義隊に参加。もう14、5歳のころから剣術の心得があって鹿島神伝直心影流という流派を学んでいて、負けたもんですから江戸湾に浮かんでいた、先程も登場した榎本武揚の艦隊、回天であるとか、蟠竜丸であるとか、あるいは高雄、この中に咸臨丸という船がありました。幕末期に勝海舟が太平洋を渡ってアメリカ大陸、あのときの船です。それがちょっと老朽化して人を運んだりする船になってる。それも一緒に東京湾を出るわけです。この船に牧田さんが負けて、逃れて、乗って、そして北上していったといわれています。函館まで行って、函館から数隻の船を、船に乗って宮古湾まで戻ってそこに浮かんでいた官軍の船をやっつけようという作戦をたてるのですが、失敗して逆に牧田さんは囚われの身になって、しばらく囚われの身になっていて逃亡して函館に戻ったときには函館戦争が終わっていた、という説が1つ。

資料5. 永倉新八（新撰組2番組長）2



「月形樺戸博物館所蔵」（撮影吉田）

次にいきます、まとめます。この牧田重勝が亡くなった場所、大正3（1914）年ですからあの札幌で集合写真を撮った翌年に彼は東京神田の駿河台病院で亡くなります。永倉新八は大正4（1915）年に亡くなっている。子母澤寛さんは、そのころ丁度明治大学に在学中です。大正3（1914）年7月に卒業していますから、牧田さんが亡くなるのが2月です。ということは牧田重勝と子母澤寛さんは奇しくも北海道厚田村を出ているんな紆余曲折を経て、最後の最後牧田さんの終焉の地、神田駿河台病院の地にいるときに子母澤さんは知ってか知らずか、知らなかったような気もしますが、運命的にこの場に吸い寄せられるようにいた。厚田から始まって駿河台病院、この駿河台病院は大正元（1912）年に造られたといいますからほぼ年号的には合っています。ただし地図には抜けているんですが、本当の名前は駿河台外科病院といいます。ここの院長先生の有名な医術は胃癌の手術です。日本で最初に胃癌の手術に成功した医師だ、とすれば牧田さんは胃癌で亡くなった可能性が強いと思います。

厚田に集まった人たちがどのような運命を辿ったかということが子母澤寛さんの作品に大きな影響を与えることになったのだと思います。もう少しお話したいこともあるのですが、このへんで私の話を終えたいと思います。